

# 未来館 News 臨時版 Vol.1

福島県男女共生センター広報誌 2011.08

今年度の未来館 News は、都合により臨時版として発行いたします。

## 館長メッセージ

東日本大震災で被災された皆様に心からお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

また今回の震災・原発事故では、各自治体や企業・女性関連施設をはじめとする多くの方々から、避難した福島県民の受け入れ、応援職員の派遣、義援金や励ましの言葉など、数々のあたたかいご支援をいただき、さらに海外の多くの皆様方や当センターゆかりの在日大使館からも、物心にわたるご支援をいただいておりますことは大変ありがたく、深く感謝申し上げます。

当センターは震災以来、臨時休館し、双葉厚生病院の患者さんなどの受け入れや緊急被ばくスクリーニング会場としての役割を果たし、4月12日から本来業務を再開いたしました。一階研修ホールは現在、浪江町の役場として提供しており、ホールの利用はできませんが、その他の研修室、図書室、福祉機器展示室や相談室などはこれまでどおり利用いただけます。また、センター主催事業や男女共同参画に関わる事業でセンターを利用する際には、宿泊料金が半額となるキャンペーンを震災前より引き続き実施しておりますので、是非ご利用いただきたいと思います。

当センターは平成13年1月に開館し、今年1月で10年を迎えるということで、昨年1月から10年記念事業を展開するとともに、いっそう地域に根ざしたセンターにしようと、次の10年に向けた計画を立てていたのですが、センター事業は大幅な見直しを余儀なくされることとなりました。「大震災」という未曾有の事態ですから、事業の展開に制約を受けるのはやむを得ません。

しかし、10万人近い避難者、海・山・農地の汚染の広がり、5万人近い失業者を生み出し、「放射線」と共存を強いられる生活など、かつてない危機だからこそ、福島県民の人権をまもる拠点施設として、その機能がいっそう発揮されなければならぬと考えております。

県内最大の避難所であったビッグパレットふくしま(郡山市)において、女性たちが気兼ねなく安心して利用できる女性専用スペース設置のために職員を直ちに派遣して、その運営の

支援にあたったのもそうした考えからです。この取り組みは、内閣府の「東日本大震災における女性の視点・ニーズを反映した避難所での好事例」で紹介いただき、日本学術会議主催「災害・復興と男女共同参画6.11シンポジウム」でも注目すべき取り組みとして取り上げられ、その詳細を郡山市婦人団体協議会会長の小林清美さんが代表して報告されました。センターとしては、他の避難所にもそのノウハウ等を活かしていただくことを期待して、この取り組みを様々な形で全国に発信していきたいと考えています。このほか、避難者への内職斡旋などによる就労支援・就労相談などにも力をいれています。

また、若い学生たちに当センター及び男女共同参画への理解・関心を深めてもらおうと福島大学との連携講座(「ジェンダーを考える」)を初めて手がけました。「震災」はまだ現在進行形であり、学生たちには生々しすぎるのではないかと不安もありましたが、「震災」をジェンダーの視点から多面的に読み解くことを重視しました。本誌には第2回目の授業で御登壇いただいた飯館村の佐野ハツノさんの講演内容と学生の感想を掲載いたしましたので、ぜひご覧いただきたいと思います。学生350人、一般参加者も70人を越え、大講義室はほぼ満席で、学生たちは、現場の最前線で実践する講師の迫力に圧倒されながらも、「生きた知」を学ぶ機会となったと思われまます。また積極的に発言する一般参加の方々から得たものも大きかったのではないのでしょうか。今後も続けたい事業です。

災害のストレスが犯罪やドメスティック・バイオレンスをしばしば増加させると言われています。また、一次避難や二次避難の集団生活から仮設住宅へと移動するに伴って、被災者の社会的孤立化も懸念されるどころです。これらの問題にも専門家やNPOの方々や連携・協力して当センターとしてできることを率先して対処していきたいと思ひます。

「がんばろう ふくしま!」のスローガンのもと、被災者の皆さまとともに、復興に向けて力を尽くしてまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

福島県男女共生センター  
館長 千葉悦子

# 福島大学総合講座「ジェンダーを考える」



佐野ハツノさん

福島大学と連携し、学生を対象とした講座を一般の方も受講できる「男女共同参画基礎講座」として開催しました(5/13~7/22)。

東日本大震災という戦後最大の災害後の講座ということで、「災害とジェンダー」をテーマに全11講座を実施しました。

今回は、5月20日(金)に開催された、飯舘村で初の女性農業委員となった佐野ハツノさんの講演「私のムラづくり実践～飯舘村からの報告～」についてご紹介します。

講座が行われた5月は、飯舘村が福島第一原子力発電所の事故による計画的避難地域に指定され、村民の方々はこれからの生活について大きな不安を抱えていた時期でした。そのような時期に行われたこの講義は、当事者である佐野さんのお話を聞くことができる貴重な機会となりました。

## 「若妻の翼」で自分発見

今から約20年前の平成元年に「若妻の翼」が飛びたちました。飯舘村が、若い層のお嫁さん達をヨーロッパに派遣する全国初の取り組みです。その頃は飯舘村も男尊女卑の考えが根強く、農家の嫁は家族の中で1番地位が低く、朝は1番早く起きて夜は最後のお風呂に入って休む状況だったり、自分の意見を言うことは、タブー視されたりもしました。

私達は「若妻の翼」に大変興味を持ちましたが、家族や周囲の理解が得られず自分達も諦めてしまい、400人~450人いた主婦の中から、19人が応募しました。応募した私達にもすごい葛藤がありました。家族にお願いし、地域の批判に負けなかったのも、頑張っ勝ち取ったものだと今でも思っています。これが私達の人生に大きな変化をもたらしました。ヨーロッパに行って私達は、自分達の暮らしを自分達で作るといふ、本当の人間らしい生き方をしていなかったんじゃないかと気がついたのです。これまで幸せに感じていたことは、ただ周りに流された生き方をしていただけではないか、これからは人生を変えて行かなくては、と思いました。それからは、仲間作りに励みました。1人では無理でも、仲間が沢山いれば、自分にない力が出て事を起こす力になる、ということがわかったのです。

当時村には、「村政は役場だけではなく、住民の力も必要だ。そして住民の半分は女性なのだから、女性の力も必要だ。」という指針がありましたので、「若妻の翼」の女性達は、村の審議会や懇談会に参加しました。初めは何も分からなくて、意見も言えず本当に悲しい思いをしました。それでたくさん勉強したら、いつの間にか力がつき、少しずつ自分達の意見を言えるようになり、5、6年経つと、「飯舘村の女性は口が達者になった」と言われるまでになりました。私も昔は静かで働き者で、良い嫁だと褒められていましたが、その頃からは「口ばかり達者になって、出歩いてばかりいる」との陰口もありました。でも一人じゃなく、仲間が

いると思うと怖いものがなくなってしまうんですね。

またその頃から若妻の翼に行ったハツノさんが羨ましい、自分達のことも引っ張ってくれないかという若い年代の女性達が増えてきました。自分だけ変わるのではなく、地域みんなで変わらないと、と私も考えていたので若い人も活動に誘いました。ある父ちゃんから「うちの母ちゃんは俺の顔を見るたびに小言や愚痴しかこぼさない。うちの母ちゃんも連れ歩いてくれないか」と頼まれ、活動に参加してもらったところ、その女性は行動力を発揮し、色々な意見を言うようになったのです。若妻の翼に参加した91名の影響力があって飯舘村は変わりました。もちろん男性も変わり、飯舘村は元気のある村になりました。



## 自主グループでの地域活動

～織里音の会・白いピアノコンサート～

家族のため、夫のため、子ども達のためだけではなく、自分のこととして明るく生きれば、みんなが変わってくると活動を通じて感じます。私は楽しかった余韻が残っていると、仕事にもっとやりがいが出て幸せだなあと感じます。でも、ほとんどの村民は、この幸せを味わうことができません。

それで、みんなにもその気持ちを味わって欲しいと思い、村でコンサートを開くことにしました。村には良いピアノがないので、自分達で買おうと考えました。そうすることで村

民も愛着がわくと思ったのです。しかしピアノはとても高く、嫁である私達にお金はありません。そこで「いいたてふるさと織里音(オリオン)の会」を作り、1口10,000円の出資金を募ることにしました。また、出資していただいた方に厚意を伝えたいと思い、出資者の名前をピアノに刻んだのです。白いグランドピアノに星座のオリオン座の絵をつけ、「織」は飯舘村に心織り成す、「里」は飯舘村を指し、「音」はコンサートを意味するというので、会の名前の「織里音」と名づけ、コンサートを毎年開催しました。

初めは批判もありましたが、シャンソン歌手を呼んでコンサートを開いたらものすごい反響があって、2、3年もすると村では「コンサート=織里音の会」になってしまい、ほかの団体の主催でも「コンサートの主催は、あの織里音の会なのか?」と勘違いされるほどでした。

## 女性農業委員として 取り組んできたこと

平成8年に農業委員にならないかとの話があり、男の人もたくさんいる中で地区の人達は私を選んでくれました。農業委員としての活動の一つに、家族経営協定の締結を村に広めたことがあります。農村の女性はただ働きをしている人たちがほとんどです。もしも何かがあった時は、自分達に何の保証もありません。だから、農家のお嫁さん達も給料をもらうべきで、自分達の立場を評価してもらえないといけないと思いました。それを実現するのが家族経営協定です。協定を結んでいけば、農業者年金に入ることができ、老後が安泰です。また、いざお給料をもらう時に夫から「いや、俺はあげないぞ」と言われることもありません。また多くの女性達は、ただ働きの上に休みがなかったのですが、きちんと休日を取ることも家族経営協定で決めることができます。まず、私が模範となろうと村の第一号になりました。それから4組作りしました。

他にも、農業委員の仕事はこれ程重要なんだよ、こういう農家に関わる法律もあるから知らないのと損するよ、などのテーマで寸劇で発表しました。

そうして、飯舘村の農業委員会は評価されて、私が3期目の平成14年に、飯舘村の会長に選任されました。全国で女性農業委員は4人の時代、私は当時53歳で、全国で1番若い女性会長だったので、様々な研修に参加させていただきました。学んだことの独り占めはもったいないと、村の農業委員に伝え、勉強会をしました。そうすると、飯舘村の農業委員会は活発だと国からも評価をいただきました。

## 3.11から一変した 村の生活とこれから

今まで築き上げてきた飯舘村の暮らし、色々な自分達の活動などが、この震災で本当に崩れ落ちた気がします。風評被害もあります。今まで私達が悪いことをしてきたわけでもないし、どうしてつらい思いをしなくてはいけないのか、私は悔しくて仕方ないです。

でも、決してゼロになったとは思っていません。飯舘村民のやる気、ふんばる心、立ち向かう力を持っている限り、また再現できると思っています。戦後の飯舘村はとっても貧しい村でした。時折冷害に見舞われ、お米を作っているのに、お米を買わなければならないという経験もしました。踏まれても踏まれても頑張るといふ精神を、私達飯舘村の人は持っています。今は原発の問題で、家族、地域が離れてしまっていますが、私達はこれからどうしていくかを考えなければなりません。

若妻の翼で得たものを一言でいうと、思いやる心とか、自分達の力でやる「まδει」な生き方です。私はいま、沢山の仲間の協力を得て「まδειライフ研究所」を立ち上げ、全国や世界に発信したいと考えています。よそに行っても目は、心は、飯舘村にあると思います。だから皆さんに、飯舘村は人間らしい生き方をしていく「まδειライフ」の村なんだと忘れないで心の奥に刻んでいただきたいと思っています。

## 〔質疑応答〕

質問:自分が男だからかもしれませんが、例えば、男女で一緒にいたら道路側を男が歩くべきとか、ご飯は男がおごるべきなどの話を聞くと、「どうして?」と思います。理由を聞くと「女の子は弱いから」と言います。私は、それは女の立場を振りかざした、男女平等とはほど遠いことだと思えますが、村で「女性なのに」と言われながら頑張ってきた佐野さんは、そのことについてどうお考えなのか教えてください。

佐野:男性もそうですが、女性も権利や主張をするばかりではなく、自分達も努力する必要があると思います。例えば、女性は「これは男の人にやらしてもらおう仕事だ」と言いますが、できることは自分もやらなくてははいけません。女性で力の弱い人は力がある男性に代わってもらい、心理的に男性が気づかないことを女性が補ってあげるなど、ギブ・アンド・テイクで、互いに理解し、助け合うことが男女共同参画の基本なのではないかなと私は思います。

## 「まδειの力」

飯舘村/監修 SEED出版 2011年

飯舘村が村を挙げて取り組んできた「まδειライフ」。「まδει」とは、手間ひま惜まず 丁寧に心をこめて つつましく という意味で、「まδειライフ」とは飯舘流スローライフ。これまでの効率優先の社会の中で見落とされていた大切なものを見つめなおす生き方を、というメッセージが込められています。

本書は、その取り組みの1年間の記録です。子どもからお年寄りまで、村民自らがユーモアあふれるさまざまな「まδει」を実践していて、その素晴らしさといったら! だからこそ、「ここには2011年3月11日午後2時46分以前の美しい飯舘村の姿があります」という冒頭のメッセージが心に刺さりします。



センター  
図書室に  
あります!

# ビッグパレットふくしま避難所内女性専用スペースの運営支援を行いました

3.11の東日本大震災以来、福島県内では多くの方が避難を余儀なくされました。

避難生活を送る女性たちが安心して過ごせる場所として女性専用の部屋が避難所内に設置されたのを機に、当センターと郡山市内の女性団体(郡山市婦人団体協議会、女性の自立を応援する会、しんぐるまざあず・ふぉーらむ・福島)が連携し、各団体のメンバーが日替わりで常駐して相談窓口の情報や女性に必要な物資等の提供を行ったり、避難している女性同士あるいは避難している女性との交流をしたりしながら女性たちの支援を行いました。

## オープンのきっかけ

避難所で生活する女性たちの「着替える場所がない」、「男性の目が気になる」などという声がかきで設置されました。

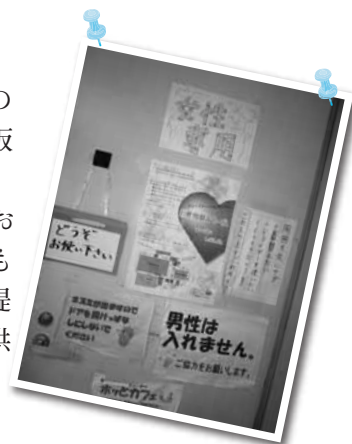
当センターでは4月23日より女性専用スペースの運営支援を開始。避難所がある郡山市で活動をしている団体が主体となって、避難区域の社会福祉協議会や町村などの協力を得ながら運営しました。(ビッグパレットふくしま避難所は8月末で閉鎖され、現在は各団体が仮設住宅等においてそれぞれ活動を展開中。)

## 運営について

避難所で生活する女性たちの安全・安心の確保と、避難女性と地元(郡山市)の女性たちとの交流を目的に運営しました。避難している女性たちが安心して過ごせるように、「相談」という看板は掲げず、スタッフは利用者と同じ目線に立って話し相手となるよう心がけました。

利用時間は毎日9時～21時まで。利用者数は1日平均50～100名程度です。スタッフとのおしゃべりのほか、着替え、授乳、ドライヤー使用、食器・野菜洗い、衣服の補正、昼寝、読書などにも利用されました。また、防犯ブザーや女性のための支援物資(下着や化粧品、生理用品など)を提供してきました。これらの支援物資は、関係する団体が持ち寄り、団体からの呼びかけで提供が可能になったりしたものです。

ストレス解消のための楽しいイベント(料理会やアートワークショップなど)も行われました。



(つぶやきノートより)

## 利用者の声

- ・「とてもリラックスできてストレスも発散できました。」
- ・「部屋を訪れるたびに我が家にいるような、戻ってきたような感じがします。」
- ・「何となく体、精神的に何か疲労なのかわかりませんが、この部屋で救われます。」
- ・「勇気・元気をいただき幸せいっぱいです」
- ・「私にとってのビタミン剤です。つくってくれてありがとうございます。」



セミナー  
案内

## 未来館セミナーを開催します ~皆さまのご参加、お待ちしております~

「苔玉」を  
作ろう!

9/3(土) 材料費/500円

講演「金子みすゞ  
の詩とところ」

10/1(土) 参加無料

「絵本」を楽しむ  
読み聞かせ

11/5(土) 参加無料

「クリスマスリース」  
を作ろう!

12/3(土) 材料費/1,000円

セミナーの詳細は、福島県男女共生センター企画調査課 (TEL (0243) 23-8303) までお問い合わせください。

未来館  
news

福島県男女共生センター広報誌

2011.8 臨時版 vol.1

## 編集・発行

(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター (女と男の未来館)  
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1  
TEL (0243) 23-8301(代) FAX (0243) 23-8314  
ホームページアドレス <http://www.f-miraikan.or.jp>  
メールアドレス [mirai@f-miraikan.or.jp](mailto:mirai@f-miraikan.or.jp)

女と男の未来館

検索